

## 『失楽園』における「蛇」について

道家弘一郎

聖書に最初に名前が出てくる生き物は蛇である。創世記第三章一節に「主なる神が造られた野の生き物のうちで、最も賢いのは蛇であった」とある。だが次の節では、その蛇が、たちまちイーヴの誘惑にとりかかる。蛇は初めからサタンの化身である。どうして、そんなことになったのか？

創世記第一章二五節、創造の第六日目、人間が創造された、その日、人間に先立って、蛇もまた他の獣、家畜とともに「土に這うもの」の一種として造られ、神はこれを見て、「良しとされた」はずである。

それが、人間が創造された第二章を挟んで、第三章になると蛇はたちまち悪魔の化身になってしまう。聖書は、その理由に「最も賢い」をあげている。木田献一監修『新共同訳旧約聖書略解』（29ページ）によると、「賢い」（アラム）は思慮深さ（箴二・一六、一四・八）と共に小賢しさ（ヨブ五・一二、一五・五）を意味する。思慮深く、小賢しい蛇、のちのユダヤ教・キリスト教においては、これは「サタン」と解される、という。旧文語訳も「蛇最も狡猾さかし」とある。

いったい、このような悪がどこから忍びこんできたのであろうか。聖書はなにも触れていない。しかし、ミル

トンの『失樂園』は、これに大きな関心を寄せた。墮落以前、樂園にいた蛇は、楽しげに跳ねまわる熊、虎、豹や、図体をもてあますような象のすぐ脇に、「うねうねと姿を見せ、ゴルディアスの結び目のように入り組んだ尻尾を織り合わせ、やがて死をもたらすことになる狡智をはつきりと示していたが、気付かれはしなかった（四三七―三五）」。また「ある種の蛇は長さも大きさも驚くばかりで、それがとぐろを巻き、翼までもっていた（七四二―四八四）。「眼は真鍮色で、恐ろしいたてがみをもっているものもあつたが、人間には害をなすどころか、すなおに従った（七四六―四九八）」という。

いっぽう、地獄を出て地球にたどりついたサタンは、自分の奸計に最も役立ちそうなものは何かと、細心の注意を払って、あらゆる生き物を子細に調べまわった。そしてその結果、蛇こそ、陰謀達成には最もふさわしい器だ、と思い、その体内に入りこむことに決めた。もともと小賢しいとされる蛇のことだから、どのようにするに振舞いをして、誰にも怪しまれる心配はないと思つたからである（九八三―九六）。

夜どおし警戒に当たっていた天使たちの眼をかくぐり、サタンは蛇を見つけた。そのとき蛇は幾重にもぐるぐると迷路のようなとぐろを巻き、狡猾な悪だくみのつまった頭を真ん中にもたげて、ぐっすり眠りこんでいた。まだ怖しい木蔭や不気味な洞窟にひそむでもなく、また危害を加えたりもしなかったから、深々とした草の上に、恐れも知らず、恐れられもせず眠っていた。サタンはその口から入りこみ、その心臓や頭部にある動物的感覚を奪いとり、そこに直ちに知的機能を吹きこんだが、眠りは妨げず、朝の来るのを待った（九八二―九八）。

だが、蛇にまで身を落とさなければならぬサタンの心中は悲しかった。

おお、何という惨めな転落、かつては神々と  
最高の座を競った私が、今や畜生にまで落ち、  
ねばねばした獣体と混ざり合つて  
この霊質を肉化し、獣化するとは

(九163―166)

だが、野心と復讐のためなら、どこまで落ちてでもかまうものか？ 高きに憧れるものは舞い上がろうとすればするほど、どこかで低く落ちて最低のものにまで身を曝さなければならぬ。高みを狙つても、所詮神には届かぬ以上、次なる狙いは、あの、嫉妬をひきおこす新たな神の寵児、土塊つちくれから造られた人間、憎悪の子、神はわれわれを苛立たせようとして塵埃から造り上げたのだ。悪意には悪意をもつて返すのが最もよい(九168―178)。

悪魔は紛れもなく「外見は単なる一匹の蛇(九413)」となった。そのため蛇と悪魔を区別するのは難しい。したがって、イーヴがアダムから離れてひとり花壇に立っているときの姿、「神々しい、天使のような、いや天使以上に柔和な、そしていかにも女らしい姿、無垢そのものといった美しさ、淑やかな身のこなし」は、見る者を畏服せしめ、しばらくは「敵意も、奸計も、憎しみも、嫉みも、復讐の念も」ことごとく忘れ去り、あたかも気の抜けた者のようにわれにもなく善良な者に変貌させてしまう(九457―466)、というが、このとき、イーヴに見惚れているものは外見こそ蛇であるが、中味はサタンである。

さて、いよいよ、誘惑のためイーヴに近づくと、彼の姿は、尻尾は、とぐろの上にとぐろを重ねて塔のように盛り上がり、揺れ動く迷路といった丸いとぐろを底にして、頭は高々ともち上げ、眼は紅玉のように煌めき、緑がかって金色に輝く首をまっすぐ丸い塔の上に立てていた。「その姿は魅力的で美しいものであった。後世の蛇類のなかに、これ以上美しいものはなかった（九四七―五〇五）」。

役者は揃ったのである。アダムはどの息子よりも容姿端麗であり、イーヴはどの娘よりも美しく（四三三―三二四）、蛇はそのどの子孫よりも魅力的であった。内実がサタンとはいえ、外見はあくまでも墮落以前の完璧な蛇、樂園を想像するに足る陣立てであった。

蛇がすっかりサタンに乗っ取られてしまった以上、これからは、審判のときまで両者を切り離して論ずることはできない。

彼は、初めは斜めに横の方から近づく（九五〇―五二二）。河口や岬に近づくと、風向き次第で舵手が船の方向を操るように、彼もイーヴの眼につくように、曲がりくねった尻尾を幾重にもおかしく輪に巻いて彼女の注意を惹こうとした（九五三―五一八）。彼女は仕事に忙しく、気にもとめなかった。彼はますます大胆になり、声をかけられもしないのに彼女の前に立ち、高く擡げた頭と艶やかに輝く首を折りまげ、媚びるようにお辞儀をしたり、彼女の踏んだ地面を舐めたりした。ようやくイーヴの眼にとまった蛇は、ことばを尽くして彼女の美しさを称え、「日々、無数の天使たちに付き添われ、崇められ、仕えられる、神々のなかの女神（九五七―五四八）」と持上げる。イーヴも追従のことばには弱く、不審に思いつながらも、どうして動物が「人間の言葉（九五三 Language of Man）」を話すのか、

と訊ねる。もはやサタンの術中に陥ったも同然、イーヴは今や蛇の呪縛のなかにいる。

一、イーヴはまず蛇に、人語を解する理由を問う。蛇は、「林檎の実（九58）」を食べたからと答える。

二、イーヴがその木のありかを乞い、蛇が導くと、それは「禁断の木（九44―45）」であった。

三、蛇はイーヴに問う、「地と空にある凡てのものの主と定められながら、園の凡ての木の實を食べてはならぬ、とは如何（九56―58）」。

四、イーヴは、「死にたくなければ、食べてはならぬばかりか、触れてもならぬ」と神は言った、という（九62―663）。創世記三章三節の引用ではあるが、ここには神命（「食べてはならない（創二17）」）への歪曲がま

じる。話がここまで来ると誘惑者はいっそう大胆になり、人間への愛と熱情、不当な命令への義憤をあらわし、激情につき動かされて身をよじる、が、颯爽と背筋を伸ばして立ちあがり、大きな問題に入る。あたかも雄弁華やかなりしアテネやローマに名の聞こえた古代の雄弁家が重大問題に取りかかる場合、やゝ沈黙のあと全身の力を集中して起立するや、その身のこなしが、口を開くまえに、聴衆を惹きつけてしまったという、そんな風情で、蛇はいきなり本題に入っていた（九64―676）。

そしてその論旨は理詰めで抵抗しがたいものであった。蛇はまず禁断の木を「神聖かつ賢明にして、知恵を与える木、知識の母（九69―680、sacred, wise, and wisdom-giving plant / Mother of science）」と称える。知識は事物の原因を見究め、知恵は最高行為者たちの思慮を辿ることができる。宇宙の女王よ、死ぬという脅迫を信ずることはない。死ぬどころか、知識も生命も与えてくれる。その証拠に、わたしはあの果物に触れ味わったが、こうして生

きているばかりか、獣に定められた限界を超えて人語を解し、より完璧な生命を手に入れた。動物に開かれているものが、人間には閉ざされているのか？ 神は、かかる些細な咎に怒るだろうか？ むしろ、死がなんであれ死の罰を覚悟のうえで、善と悪とを知る一層幸福な生活を求めたあなたの勇気を誉めたいだろうか？ 善を知るはよし、悪なるものありとすれば、なぜ知ってはならぬのか、それだけ容易に避けられるのだから？ それゆえ、あなたがたを苦しめて、神は正しいとはいえない。正しくなければ神ではない。それゆえ、恐れることも、従うこともない。死を恐れることが、かえってその恐れをなくする（なぜなら善悪の木の実を食べることは正しいことなのに、正しいことを罰するという神は不正である。不正ならば神ではない、正しい神の命令でなければ恐れることはいから、不正な恐れは自然消滅する）。

では、なぜこれを禁じたか？ ただ恐れさせるため、あなたがた崇拜者をただ無知蒙昧のままにしておくためか？ あなたがたがそれを食べた日には、今はまだ朦朧とした眼がはっきりと見えるようになり、神々と同じく善悪共に知って、神々のようになるだろう。わたしが動物から人間に、あなたが人間から神々になることは見事な比例だ。あなたが死ぬとすれば、人間性を脱ぎすてて、神性をまとうことだ。脅されているけれど、これしきのことしか起らぬとすれば、死はむしろ望ましいことだ。

人間は神々と同じものを食べながら神々になれないとは、神々とはいったい何なんでしょうか？ 神々はわれよりも前から存在しており、その利点を利用して一切が彼らから生じたと信じさせようとしているが、わたしはそれを疑う。美しい大地が太陽に暖められてあらゆるものを産み出すのを見たが、神々が産み出すのを見たことはない。もし神々が産み出したのなら、だれがこの木に善悪の知識を封じこめたのでしょうか、食べれば直ち

に神々の許可なくして智恵が得られるのに？ また、こうして人間が知るを得て、どこが悪いのでしょうか？ 万物が神のものならば、人間が知識を持って、なんで神を傷つけましょうか？ また、この木が神の意に反して知識を与えるでしょうか？ もしかして、嫉妬？ 嫉妬が神々の胸に宿るものでしょうか？ これらいろいろな理由を考えると、あなたはこの美しい果物を食べるべきです。だから優しい女神よ、手を伸ばして心おきなく味わいなさい（九六九―七三二）。

蛇のことばは、イーヴに大きなショックを与えた。道理もかない真理にも満ちて説得力に富むその言葉は、イーヴの心にたやすくしみこんでいった。時刻は昼食時、激しい空腹は、その果実の芳しい香りに刺激されて直ぐにも手を伸ばし食べたくなるが、さすがに躊躇し、蛇のことばを心のなかで反芻する（九七三―七四三）。

さすがに果物のなかの果物、ことばを話すことのできなかつた蛇に、神を賛美するまでの能力を与えた。神も善悪を知る知識の木と名づけて、賛美を隠してもいない。禁制はかえって、人間に欠けた善が、この果実によって伝わることを暗示し、食べることを推奨しているのかもしれない。善ははっきりと知らなければ持ったことにならない、あるいは、持っても知らなければ全然持っていることにならない。では、はっきりいって、神は人間に知ること、善も、賢くなることも禁じているのだろうか？ そんな禁制に人を縛る力はない。しかし、（自由を行使して禁制を犯した結果）あとで死が臨むのであれば、内なる自由は何の益があるだろうか？ この美しい実を食べた日に死ぬというが、蛇は死んだか？ 蛇は食べて生き、知って話し、理性と分別をえた、

今が今まで理性とは無縁だったものが。死は人間にだけ考えられているのか？ この知識をもたらす食べものは人間には禁じられ動物には許されているのか？ いかにもそう見える。しかし初めて味わったあの動物は、惜しむどころか、その身におこった良き好事を、嘘も偽りもなく、喜んで人間に好意をもって提供しようとしている。信頼できる通報者だ。善と悪を知らずして、何を畏るべきかが、どうして分かるうか？ 神や死や、掟や罰についても？ ここにすべてを癒やす靈験あらたかな実がなっている、見るからに美しく、食欲をそそり、賢くしてくれそうな実が？ としたら、取って食べ、心と体を同時に養うことに何の妨げがあるうか？

(九七五―七九)

このように言って、イーヴは手を伸ばし、取って、食べた、時刻は正午。

大地は傷みを覚え、自然も万象を通して呻き声をもらし、すべては失われた、と悲嘆の徴を示した(九七二―七四)。罪深い蛇はこっそり元の叢に入りこんでいった。イーヴは食べることに夢中で、気づくこともなかった(九七四―七八)。

蛇が 'serpent' という単語で登場する回数は九巻で十五回、十巻で十四回、'snake' としては九巻で三回、十巻で一回、九・十巻における頻度は他巻より圧倒的に多い。頻度では他巻は問題にならない。

第十巻になると、裁きを任かされた御子が地上に下り、誘惑者サタンと、掟に背いたアダムとイーヴを裁くことになるが、出発するに先立ち父なる神に、「あの蛇自体には、自ら罪を犯そうとした証拠はありません(一〇

84」と弁護した。

御子が樂園に降り立つと、アダムとイーヴは木の間に隠れた。御子に「アダムよ、どこにいるのだ？……すぐ出てくるのだ（一〇13―108）」と命じられると、アダムとその後からイーヴが、絶望の色を浮かべて悄然として出てきた。罪は糾弾されなければならない。

アダムとイーヴの釈明を聞いた後の御子が「主なる神（一〇163、the Lord God）」として臨む裁きに注目したい。「サタンは逃亡によって自ら罪人であり、あらゆる律法に反逆者たることを明らかにしたのだから、欠席のまま処断されて然るべきである（一〇82―83）」とは、すでに天上で、父に語ったことである。そこで蛇に対する御子の言葉は、「蛇よ、お前は、このようなことを行ったからには、凡ての家畜や野の獣以上に呪われなければならないぬ！ お前は生きている限り、地面に腹をつけて這い、ただ塵埃のみ食らわなければならないぬ。お前とこの女とのあいだに、そしてまたおまえの末裔<sup>すえ</sup>とこの女の末裔とのあいだに、わたしは怨恨<sup>うらみ</sup>を置くつもりだ。この女の末裔はやがてお前の頭を砕き、お前もその者の踵を砕くであろう（一〇175―181）」という簡潔な判決であった。

問題は、その前後にある地の文、いわば作者ミルトンの付言である。すでに天を出立するとき父にも語ったように、蛇の責任能力であるから、知性的判断も言語能力もないゆえ、アダムがイーヴに、イーヴが蛇に責任を転嫁したように、己を悪事の道具に利用し、天地創造の際に与えられた己本来の目的を台なしにしてくれたあのサタンに責任を負わせることもできなかったが、その本性が損なわれ悪しきものとなった以上、このとき神に呪われても当然のことであった。だが、私が注目するのは、それに続く二行である。「これ以上のことを理解することは人間には関係なく（事実、人間はこれ以上何も理解できなかったのだ）（一〇169―170）」とある。

まことに人知を超える領域がある、自然界にも人間界にも。人生において最も不可解なることは、「善なる者には禍を、悪しき者には幸いを、もたらしながら、この世が過ぎてゆく（一二537―538）」という矛盾である。こういう謎に対処する途を、天使ラファエルはすでに第八巻で語っている。

第八巻の冒頭でアダムはラファエルに問う、広大な宇宙では、一粒の点、一つの原子アトムにしか見えない薄暗い地球のまわりに、多くの気高い、しかも幾倍も大きな天体を贅沢に造り、到底数値かずでは表すことのできないような靈妙な速さで回転させ、日ごと、熱と光を当然の貢ぎ物のように送らせ、かすずかせているのは、なぜなのか、と（八15―38）。

ラファエルは答える、「天は『神の書』としてお前の前に置かれている、そこに神の驚くべき業わざを読むために（八66―68）」と。神の言ことばの書が聖書であり、神の業わざの書が自然である。そして率直に大胆に、アダムの疑問に答える、「大きなもの、輝かしいものが、必ずしも優れたものとは限らない。地球はいかにも小さく、輝きも持たないが、空しく光っている太陽よりも多くの実質的な良さを多分にもっている。太陽の力は自らに対しては実効をもたないが、地球に吸収されたとき初めて威力を発揮する。その燦然たる光体（＝太陽）は地球に奉仕するというより、地球の住人であるお前に奉仕している（八90―99）」と。ラファエルは神からの使者としてアダムに、「あなたのために世界はあるの」だ、と説いたのである。

これは天動説か地動説かの議論のなかで語られた一節である。ついでながら、これについてはミルトンに懐か

しい想い出があった。ミルトンが満三〇歳を迎える一六三八年、フィレンツェにガリレオを訪ねたことがあった。ガリレオは七五歳、ほとんど全盲に近く、フィレンツェ近郊アルチェトリに住んでいた。一六三三年有罪の判決を受け、活動は制限され、自宅監禁の状態にあった。『アレオパジティカ』には、「わたしがあの有名なガリレオと会見したのは実にそこにおいてであった。彼は年老いて、異端審問所の囚人であった。天文学において、フランススコ派やドミニカ派の審問員が考えるのとは違った考え方をしているためであった」とある（コロンビア版 IV 330, エール版 II 538）。

このとき、ガリレオはミルトンが大詩人となることは知らなかったし、ミルトンは自分が全盲になることを知らなかった。

したがって『失樂園』第八巻の天文学論争に格別の思い入れがあったことは想像に難くない。第一巻288行の「トスカナの科学者」から始まって、『失樂園』におけるガリレオへの言及は多い。

いずれにせよ、無用な穿鑿に答えは返ってこない。天が動くのか地が動くのか、「このような秘められた事柄について、とやかく思い悩むのはよすがよい。こういった事柄は天に在ます神に委ね、お前はただ神に任せ、神を畏れるがよい。……お前は神の与えたもうたものに、……喜びを見出すがよい。天は余りに高すぎ、そこで何が行われているか、お前に知ることはできない。心より遜り、かつ賢かれ！ ただ自分と自分の存在にかかわることだけを考えよ（八167―174）」とラファエルは諭す。

アダムもこれに答えて、「人間の心も、生活の実用から離れて晦渋で深遠な事柄について、ただ漠として何かを知るのではなく、日常の生活において自分の前にあるいろんなことを知ることが最善の知恵だということを、

悟るにいたりましょう。それ以上のことはいわば煙霧のようなもの、空虚であり、無関係であり、愚かにもそれに拘かひずちうと、人間に最も関係の深い事柄に対して疎おろそかとなり、不用意になり、ただひたすら昏迷に陥るのみ、ということになりましょう（八190—197）」と和す。

本論において問題とする、蛇とサタンへの裁きについても、ラファエルがアダムに語るところは甚だ示唆的である、「ただ自分と自分の存在にかかわることだけについて思いめぐらし、他のいろいろな世界のこと、そこにとどのような生き物が住み、それがどんな状態に、境遇に、あるいは立場にあるか、についてはあれこれ夢想する必要はない。地球についてばかりでなく、至高いしたかき天についてもこれまでわたしが啓示しめしてやったことで、満足してもらいたい（八174—178）」という。

アダムとイーヴの誘惑に成功したサタンは意気揚々と地獄の万魔殿に引揚げ、戦勝報告に臨む。「満堂の拍手喝采をもって迎えられると思いきや、意外にも、四方八方から彼の耳を襲ってきたものは、無数の舌、舌、舌から洩れてくる不気味なしゅっしゅっという声であった。満堂の会衆が公然と発する軽蔑の叱声であった（二〇504—509）」。

声ばかりか体にも大きな変化が起こった。「顔は引きつって細くとげとげしくなり、両腕は肋骨にくっつき、両脚が互に絡み合うのを感じるとまもなく、両脚をすくわれてどっと倒れた。腹這いになったまま、必死に、空しくあがく一匹の巨大な蛇の姿になっていた（二〇511—515）」。

これは「より大いなる力が今彼を圧倒し、裁きに従って、彼が罪を犯した当時の姿に変えて彼を罰したのであ

った（一〇五五―五五七）」と作者は語る。この裁きは、サタンに同調し、神に背いた全ての墮落天使に及び、全員が蛇の姿に変えられ、何かを言おうとしても、舌は二又に分かれて、ただしゅっしゅっという叱声になってしまい、姿は蛇の体となった。

首魁のサタンは最も巨大な巨竜ドラゴンと化した。一時はビュート（デルポイの古名）の谷間の泥の内に生じた巨大な錦蛇ビュートン（一〇五九）を連想させたが、大きさも力も依然として仲間を凌ぐものであった。サタンに次ぐ墮天使の頭目たちも、その地位や役目に応じて、それぞれその罪にふさわしい蝮カサリ、毒蛇、両頭蛇、角蛇、水蛇、海蛇、飢渴蛇と化した（一〇五九―五五九）。あたかも「七つの大罪」に対応するかのよう七匹の蛇が列挙されている。墮天使たちが異教の神々として長らえたことと符節を合するがごとく、これら七匹の蛇はすべてギリシア語から出ている。

scorpion 蝮 okoprios スコルピオス、「大ばさみで切る」が原義。拷問・苦難・危害などの象徴。

asp 毒蛇 doris アスピス、「盾」より、蛇の頭が盾に似ていることから、北アフリカ産のコブラ科コブラ属。

amphisbena 両頭蛇 amphibaina アムピスバイナ、両頭有翼の蛇、前後に頭があり、前後に進むことができる。不実・姦通をあらわすという。

cerastes 角蛇 kerdoris ケラストス、頭上に四つの角があり、権力欲を表す、七匹の蛇の中心をなし、七つの大罪のうちの最も重大な傲慢に対応する。

hydrus 水蛇 idros ヒュドロス、その毒は水腫をおこす。ギリシア神話のヒュドラ参照。

ellops 海蛇 elous エロプス、無言であるため、「怖ろしい (drear)」という形容詞がつく。

dipsas 飢渴蛇 Siphac デイブサス、嘔まれると極度の渴きを生じることから。

七匹ともオックスフォード英語辞典には、『失樂園』の、この箇所が引用されている。

因みにサタンが変えられた dragon もギリシア語では、ὄφρακιον、[「目の鋭いもの」が原義。

サタンを筆頭にこれら領袖たちが万魔殿から颯爽と出てくるものと期待して待ちうけていた下役の随天使たちも、両腕が落ち、槍も盾も落ちて地面に倒れ蛇身になり、喝采や凱歌のつもりで発した歓声が、侮辱する叱声・罵声に変じていた。

このとき、彼らの変身と時を同じうして、突如として近くの地中から森が姿を現し、一本の木に美しい果物をたわわに実らせたのである。高きにあつて一切を司りたもう神が、いっそう自分たちを苦しめ辱めるためかと疑いながらも、焼けつく渴きと激しい飢えとに苛まれ、我慢できなくなって、続々と折り重なってその木によじ登り、その果物を貪り食った。しかし彼らが口にしたのは果物ではなく苦い灰であった。余りの苦さに唾もろとも吐き出さざるをえなかったが、飢えと渴きには耐えられず、何度も何度も繰返した。また絶え間ない自らの叱声にも悩まされ続け、遂には疲労困憊してしまった。

だが、ここで作者ミルトンが挿入した一行は、読者の眼を瞠らせずにはおかない。

Till their lost shape, permitted, they resumed,

やがて神に赦されて、彼らは失っていた元の姿に戻ることができた(一〇五4)。

というのである。彼らは、なんと元の天上の天使たちの姿に戻ったのである。「やがて」というのがいつかは、最後の審判の後であろう。

そして「最後には救い主が、父なる神の栄光のつつまれて天より現れ、サタンをその邪悪な世界とともに亡ぼし、燃えさかる焔のなかから、浄められ純化された新しい天と新しい地、正義と平和と愛にもとづく永遠無窮の時代を起こし、歓喜と永遠の実りをもたらしたもうであろう（二二544―551）」と天使マイケルは告げる。まさに「神がすべてにおいてすべてとなる（三341、六732）」ときである。

(完)